Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-06

日本語における長母音の短母音化

薛，晋陽

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2014-09-25
(Date of Publication)
2015-09-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第6207号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006207

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論文題目　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

日本語における長母音の短母音化

氏　　名　：　薛晋陽

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名	（主）	田中真一	准教授
	（副）	松本曜	教授
	（副）	鈴木義和	教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

要旨

本研究は日本語における長母音の短母音化に焦点を当てる。日本語における長母音の短母音化現象の分析を通して、各先行研究で述べられた位置に関する非対称性や、和語、漢語、外来語それぞれの短母音化現象を引き起こすメカニズムの解明を記述・理論両面から試みる。また、短母音化現象を生起させる複数の要因間の関係を提示し、それぞれの個別要因の一般言語学的意味を考察することも主な目的としている。全体として、長母音の短母音化の生起がアクセント構造と密接に関係することを主張する。

第2章においては長母音の短母音化についての先行研究を簡単にまとめた。続く第3章、4章、6章、7章は語末位置に視点を置き、それぞれ和語、漢語、外来語における語末長母音の短母音化の生起条件およびそれらの生起条件の存在要因について議論を行った。以下は第3章から第8章の内容と主張をまとめる。

第3章においては、和語、漢語の語末長母音の短母音化の生起条件について考察を行った。和語の短母音化については、母音の違い(「イー」か「オー」)と単語親密度が和語の語末長母音の短母音化に影響を与えるという結果となった。

漢語の短母音化については、各先行研究の主張を取り上げ、先行研究の主張を検証するとともに、論証が不十分な点や問題点について分析を加えた。第3章では、漢語についての語末長母音の短母音化に関する先行研究の記述を統計的に検証した上で、アクセント核の有無、或いはアクセント核の位置の違いという視点から、語末長母音の短母音化の生起条件をより深く探った。以下が第3章によって明らかとなった主な内容である。

まず、親密度に関して先行研究の記述を統計的に検証した。親密度が高ければ語末長母音の短母音化が起こりやすく、さらにHH の音節構造を持つ2 字漢語(窪薗2000、Kubozono2003)という条件が働いていることが確認された。

次に、第3章でのオリジナルな発見である、語末長母音の短母音化とアクセント型の対応関係についてまとめる。

HHの音節構造を持つ2 字漢語という条件が有意に働くことが本研究で統計的に明らかとなったため、この条件に絞った上で、アクセント型の違いによって語末長母音の短母音化の生起に違いが出るかを調べた。第3章では、東京方言と近畿方言について、HHの音節構造を持ち頭高型を有する2字漢語という条件が満たされれば、語末長母音の短母音化を起こしやすいということを統計的に検証した。さらに、東京方言と近畿方言の間には方言の違いによる差が見られないということもわかった。すなわち、「親密度が高く、頭高型を有するHH という音節構造を持つ2 字漢語」という語

末長母音短縮の条件は、東京方言であろうと、近畿方言であろうとあてはまるのである。

さらに第4章においては、頭高型アクセント効果が何故存在するのかを明らかにするために、東京方言話者と近畿方言話者に対して産出・知覚実験を行い、語末長母音の短母音化という音韻現象の生起と日本語話者が産出･知覚の面で持つ特徴との関係性を示した。

産出に関しては、HH という音節構造を持つ2 字漢語の語末長母音の持続時間は、平板型の語と比べ、頭高型の語のほうが有意に短い。よって、短く発音される頭高型の語は短母音化が起こりやすいといえる。

知覚に関しては、語末母音の持続時間が極端に長くも短くもない場合に、頭高型アクセントという情報を利用して、(平板型を有する場合に比べ) 語末母音をより「長」と知覚しやすいことがわかった。更に、語末母音の「長」の知覚に関して、語が頭高型を持つ場合のほうがより早い段階で反応できることもわかった。語末母音長に関して、産出の持つ特徴と知覚の持つ特徴がお互いに影響し合っていると言える。上記の産出・知覚の要因が重なって、短母音化の条件が作られていると考えられる。

第 5 章においては、長母音の短母音化に見られる非対称性について論じた。まず、意味情報の伝達という視点から、「機能量」という概念を導入し、「経済性」と「情報性」が会話を成り立たせる際に持つ役割を考慮しながら、改めて長母音の短母音化に見られる非対称性を考察した。

本章のアンケート調査では、語中・語末という位置の違いにより、長母音の持つ機能量に差が出た。日本語は母音の長・短に関して弁別性を持っているが、語の位置(語中・語末)によって、ある単語と別の単語を区別する際に機能量に差があり、語中位置にある長母音よりも語末位置にある長母音の持つ機能量が少ないため、語末位置にある長母音が短縮されやすいといえる。よって、機能量の差が非対称性を引き起こす要因の一つであると考えられる。

次に、第5章では知覚実験を行い、日本語母語話者が持つ知覚面の特徴が、短母音化に見られる非対称性を引き起こすもう一つの要因であると論じた。母音の長さが短くなるのに従い、語中位置にある母音よりも語末位置にある母音のほうがより長母音と知覚されやすい。この特徴は特に刺激語が頭高型であるときに顕著である。これは、頭高型でHHの音節構造を持つ2字漢語が短母音化を起こしやすいという言語事実にも一致している。

第6章では、日本語の外来語における語末長母音の短母音化現象を取り上げた。外来語の語末長母音の短母音化についてアンケート調査を行い、短母音化の生起条件を明らかにした後、それらの生起条件の存在要因について分析を行った。具体的には、英語からの外来語を中心に、音節構造、母音の種類という視点から、原語とのインターフェースにも考慮しながら、外来語の短母音化条件を深く探った。

音節構造の観点では、アンケート調査を通じて、語末に LH#(軽音節-重音節の連続)という音節構造を持つ外来語が、HH#(重音節-重音節の連続)という音節構造を持つ外来語よりも語末長母音の短母音化を起こしやすいことを明らかにした。これは漢語の短母音化条件(窪薗 2000、Kubozono 2003、第3章)とは異なった結果であった。

母音の種類という観点でみると、長母音「アー」が他の長母音よりも語末の短母音化を起こしやすいということが確認された。そして、この母音の違いによる短母音化の生起度の違いが存在する理由については、 (i)語種の違い、(ii)原語(英語)への忠実性という2点から分析を行った。

語種の違いについては、よく言われるように、上代日本語は CV という単純な構造しか持たず、平安時代に入ってから、漢語の借用や和語の子音脱落、母音融合などにより、短母音と長母音の対立が生まれた(窪薗 1994)わけであるが、漢語と和語には「ア」の長さのみによるミニマルペアがない。日本語話者にとっては、産出においても、知覚においても、ほかの母音より「ア」と「アー」の区別が難しいため、長母音「アー」は比較的に短母音化を起こしやすいのではないかと推測できる。

上記の語種の違いに基づく分析のほかに、母音の違いによる効果を引き起こすもう一つの要因として考えられるのは原語(英語)音声への対応である。本研究のデータによると、外来語の語末長母音「アー」に当たる英語の 99.3%(297/299)はシュワーである(例えば、doctor → ドクター)。

そもそもシュワーは弱化された母音であって、音質も不明瞭であるため(西原 1987)、短母音として知覚されやすいことが予測できる。過去には上で述べたような綴り字の影響が大きかったものの、現在は、綴り字よりも英語の発音のほうにより忠実になった結果、外来語語末の長母音「アー」が他の母音と比べて短母音化を起こしやすいことが推測される。

上記の推測が妥当かどうかを検証するために、第7章では、英語からの語末シュワーを日本語にする際にどのような特徴が現れるかを調べ、日本語母語話者の知覚実験と英語母語話者の産出実験を行った。その結果から、シュワーの借用はシュワーに当たる部分の綴り字によると結論付けた。つまり、第6章で論じた英語音声への対応は、外来語における語末長母音の短母音化の生起要因ではないという結論が出た。

第8章では、音節構造とアクセント構造の視点から漢語、外来語の語末長母音の短母音化現象を分析し、漢語の短母音化条件(第3章)と外来語の短母音化条件(第6章)

は一見してまったく異なるように見えるが、その動機付けは同じで、それぞれのカテゴリー内での無標の構造を求める力が働いていると結論付けた。

本研究は短母音化の生起とアクセント構造が密接に関係することを発見した。具体的には、漢語の短母音化においては、HH の構造を持ち頭高型を有するという条件が満たされれば、他の条件よりも短母音化を起こしやすい。これは、短母音化の生起は HL の構造を持ち頭高型を有する語を求めるからである。これに対し、外来語の短母音化においては、LH#の構造を持つ語が HH#の構造を持つ語よりも短母音化を起こしやすい。語末の長母音がアクセントの計算(例:メ¹ロディー、メ¹ロディ)に影響を及ぼさないため、短縮しやいのである。また、漢語の短母音化の条件が LH#を目指さないのは、LH#の構造を持つ語のデフォルト型と LL#の構造を持つ語のデフォルト型が異なるからである。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	薛　晋陽
論 文 題 目	日本語における長母音の短母音化

要　　旨

本論文は、「あいそう → あいそ」(愛想)、「コンピューター → コンピュータ」等に見られる、日本語における長母音の短母音化現象について種々の観点から分析したものである。この現象については、従来から、語末要素によく観察されるということは知られていたが、分析対象が限定されており、その生起要因について未解決の点が残されていた。本研究は、このような課題を出発点とし、一方では、和語、漢語、外来語といった語種全般に渡る分析を行い三者の関係を明らかにし、他方では、辞書を利用したデータ分析、音響音声学に立脚した生成調査、知覚実験といった多岐に渡る手法によって、この現象の生起条件を考察している。

本論文は９つの章から成る。以下では、各章の内容を紹介しながら、その主張と内容を検討して行く。

第１章では、提出論文の構成と目的、およびその意義が述べられている。続く第２章では、本研究の分析対象である長母音の短縮現象についての先行研究を、日本語と他言語を例にしながら紹介し、本論文との関わりについて述べている。

第３章から第７章までは、本論文の中核を成す部分である。第３章では、語末長母音短縮の生起条件について提案された二つの見解、すなわち、「HH（H: 重音節）という音節構造を持つこと」(窪薗 2000)、そして、「子音連続を持つこと」(Alfonso 1982) について紹介した上で、独自に収集したデータによって両者の比較を行い、前者の方がより高い説明力のあることを報告している。また、親密度の高い語ほど母音短縮が起こりやすいこと、語種によって短縮する母音が異なり、和語・漢語は/oo/が短縮しやすいのに対し、外来語では/aa/が短縮しやすいことを指摘している。さらに、平板型アクセントよりも頭高型アクセントの方が語末母音の短縮を起こしやすいといった、アクセント型と母音短縮との関連性を新たに提示し、続く第４章への橋渡しとしている。

第４章では、アクセント型と母音短縮との関係を検証すべく、東京、近畿二つの方言話者を対象に、生成と知覚にもとづいた分析を提示している。その上で、生成、知覚いずれのレベルにおいても、アクセントのない、いわゆる平板アクセントの語においてよりも、アクセントのある、とくに頭高型アクセントを持つ語においての方が、語末母音の短縮が起こりやすいことを示し、それが実在語の生起パターンと共通することを指摘している。

続く第５章では、短母音化を保証する条件として、機能量 (King 1967, Vance 2008) という概念を援用した分析を試みている。その結果、語中と語末位置とでは、母音長短による機能量（意味弁別力の大きさ）に差があり、機能量の大きい語中位置においては、相対的に短縮が許容されにくく長母音が保持されやすいのに対し、それの小さい語末位置では短母音化が許容されやすいことを報告している。さらに章の後半では、生起位置とアクセント型に関する非対称性について考察するために、語末母音長を少しずつ短縮した際の長母音聴取率を、異なるアクセント型を持つ語のペアをもとに分析し、アクセント型と位置の組み合わせによって、日本語話者の母音長の知覚が異なることを報告している。

第６章では、外来語における語末長母音の短縮について分析を行っている。和語、漢語において/oo/が短縮されやすいのに対し、外来語においては/aa/の短縮が起こりやすいという第３章での結果を統計的に確認した上で、短縮のターゲットとなる音節構造が語種によって異なること、具体的には漢語では HH がおもな対象になるのに対し、外来語では末尾に LH#（L：軽音節）の音節構造を持つものがおもな対象となることを提示し、第８章で展開される議論の一材料としている。

第７章では、外来語において語末長母音短縮のおもな要因となる英語曖昧母音（シュワー）が日本語として借用される際のパターンを分析し、そこにおもに綴り字が関与することを指摘している。語末が曖昧母音という同じ条件下にあっても、原語（英語）において末尾に r を含み、曖昧母音とともに２文字で表記される場合は日本語化の際に母音短縮が起こりにくいのに対し、そこに r を含まず、母音が１文字で表記される場合は相対的に短母音化が起こりやすいといった、綴り字との関わりを提示している。

第８章は、提出論文全体の考察として、短母音化が語種によって異なる音節構造、そして母音を選択する理由について独自の主張を展開している。音節構造については、各語種においてアクセント型を含めた無標の構造を求めるという要請によって、また、母音の種類については、語彙層に関わる制約によって、それぞれ異なる形で母音短縮に関与することを主張し、語種と短母音化との間の整合性を求めている。

第９章は本論文のまとめと課題について述べられ、論文を締めくくっている。

以上見たように、本論文の評価すべき点について次のようにまとめることができる。第一に、これまで部分的に論じられてきた長母音の短母音化という現象に関して、語種の違いに着目し全体像の解明を試みたことである。第二に、音韻論の観点から立てた仮説を音声実験によって検証し、実験結果を統計的に分析することを通して、仮説の妥当性を実証したことが挙げられる。第三に、上記の分析により音声、音韻研究の分野に対して新たな知見を提示したこと、とくに、アクセント型と母音短縮との関係についての新しい知見をもたらした点が挙げられる。反面、本論文は、研究史との関わりについて十分に触れられておらず、分析で得られた知見の位置づけが十分に捉えられていない、また、個々の分析や記述に若干不備が見られる等の弱点のあることも否めない。しかしながら、本論文が、関連諸分野に対し新しい知見をもたらした意欲的な論考であることには異論の余地がない。

以上に鑑みて、本審査委員会は全員一致で、学位申請者の薛晋陽が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

主査記載 氏名・印	岸本　秀樹

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	岸本　秀樹	副　査	教授	松本　曜
副　査	准教授	田中　真一	副　査	准教授	石山　裕慈
副　査	准教授	ピンテール・ガーボル 国際コミュニケーションセンター			